第10章

阪東恭一の経験と独断で斬る業界基礎知識

2013 DATA'S

◆各業界の現実と生活を知る

本章では、これからマスコミに就職しようとする人たちに阪東恭一が見てきた、もしくは経験してきたマスコミについて話していきたい。それは、マスコミ志望なのにマスコミで働く人の実態を知らないことが多いからだ。また、実際の仕事がどういうものなのかを知らないと他の業種と比較できないはずだ。

逆に他業界に入ろうという場合もそうだ。たとえば人気があるからと銀行に入ったらもう大変だ。旧帝国大学の出身者とは最初に配属される支店（銀行用語で営業店という）から、出世コースで差がつくのだ。私大や無名国立大出身者は都心から電車で数十分の「ベッドタウン」（しかも、犬と猫しか歩いていないような）で、高齢者や主婦相手に「預金獲得」の営業をさせられる。一方のエリート組は官僚相手の「虎ノ門支店」などに配属される。

もっとも、銀行・証券は配属で年収に差がつかなくても、同窓会でマスコミに行った「できの悪い奴」と再会したときに、年収が「できの悪い奴」の半分程度だという事実にガクゼンとさせられることも少なくない。

◆出版社の生活

▼大手から中小・零細まで雑居する出版社

出版社は2008年現在で約4000社。一口に出版社といっても、大手から中小・零細までさまざまだ。大手とはいっても、講談社で社員数は約1000人。他の業界の大手企業から比べれば、その規模は小さい。一方、オヤジが一人で書籍を年間に数点出版しているような出版社もある。

講談社とその「系列」の光文社の音羽グループ、小学館やその系列の集英社、白泉社などの一橋グループ、それに文芸老舗の文藝春秋、新潮社が大手といわれる。

一般的に総合出版社（雑誌・単行本・文庫などを総合的に出版している）は、雑誌の編集部からスタートすることが多い。激務には変わらないが、昔はタクシー乗り放題（タクシーを使える会社も）、友人や恋人と飲んでも交際費で落としてもお咎めなしという時代もあった。新潮社などはグリーン車で取材のための出張をしていた。金満というか、大学出たての若造がハイヤーがわりにタクシーを乗り回している姿は滑稽でもあった。

リーマン・ショック以降は賞与半減という会社もあるが、そもそも給与が高いのが大手出版社だ。時間も昼に出勤（朝まで作家やネタ元も新聞記者、官僚とぐだぐだ飲んでいるので）となる。

▼編集者の生活

雑誌の編集者になったりすると大変だ。締切前は徹夜か午前1〜3時までの「半徹夜」となる。週刊誌ならば毎週発売されるので、決まった日に締切（校了、下版ともいう）がある。総合週刊誌でいうと「週刊現代」、「週刊ポスト」や新聞社系の「週刊朝日」、「サンデー毎日」は木、金曜が締切となる。「週刊文春」、「週刊新潮」は月曜、正確には記者の締切、デスクは火曜日が締切だ。

締切前以外の日常は正午出社で夕方退社か、接待だ。取材の後にまた会社に戻る場合もある。

昼飯は会社の食堂（すぐ飽きる）か、近所の店（したがって秘密が漏れる場合や会社訪問や面接の前後はウロウロしない）になる。夜もそうだ。「てんやもん」というが、昔はよく中華食堂、蕎麦屋に出前の注文もしていた。

月刊誌の締切は発売前1週間ぐらい（印刷、製本、配送の間）となる。月2回刊行、季刊誌もそれぞれのサイクルで。

書籍（文庫含む）は基本的に個人作業で、年間に8〜10点ぐらいの企画を進める。企画立案からすべて自前で行うか、編集プロダクションへ外注するかでその幅は違ってくる。自分の都合で編集制作の作業を進行させることができるが、仕事が佳境に入ってくると雑誌編集者同様、徹夜が続いたりすることもある。週刊誌は毎週締切があるので、そのリズムにさえ慣れれば気分としては「楽だ」。月刊誌は3号先（3か月先の刊行）の企画収集から、目前の雑誌の締切まで複数の号が同時進行になるので、大変な場合もある。

▼編集者のアフターファイブ

締切のとき以外は、夕方以降が「フリーゾーン」となる。恋人や大学の後輩に会っていてもおかしくない。家が会社の近くだと、子供と食事するために帰る「パパ」も。

ナイトライフは、以前は銀座・六本木から新宿2丁目のおかまバー街、小津安二郎の映画に出てくるような新宿ゴールデン街が「通常ルート」だったが、昨今はいきなり新宿3丁目のかくれバー、クラブにいく場合も多くなっている。最近は「N」（ねこめ）が有名だ。新宿ゴールデン街のバーで「食事」を頼む「シロウト」も多いとか。これも不況の節約のせいか。

こうして楽しんだ後はタクシーでの帰宅が当たり前だったが、経費節減で領収書を切れないことも多くなったため終電での帰宅も増えている。

▼貧乏編集者の場合

大手・準大手以外の出版社はどうだろうか。医学書院、税務研究会など一部の専門出版社を除いて、年収は300万円から500万円と低い。といっても、メーカーやコンビニ、スーパー、デパートなど流通業界なみにはある。

仕事は大手と同じか、楽な場合もある。こればかりは会社によって違う。とくに経営者が同族なのとサラリーマン社長では、「こき使われ方」が大きく違うので注意したい。

午前10時出社が大半、9時のところもある。まるでサラリーマンだ。

昼は同僚とつるんでいつもの定食屋、蕎麦屋、中華に。なぜかレストランにはあまりいかない。「早飯早糞」というせっかちな業界気質のせいもある。

夜は締切前以外は適当に終わって、同僚と安い居酒屋に飲みに行くか、帰宅する。貧乏なので「郊外」の90分圏内に自宅を建てるか、マンションを買う人が多い。

貧乏でなくても「女房」（こちらの年収が多い場合も！）の実家に引き寄せられるの（実家の魔力）で、結婚するときは相手の親の住所を確認する。

なるべく「田舎娘」か自分が田舎（関西、名古屋圏、福岡圏も含める）出身なら

同郷の人と結婚する。札幌と福岡出身者が結婚すると盆暮れの帰省が大変だ。とくに子供ができると。商品ではないが両方の親に見せないといけない。スカイプよりやはり実物だ。

▼極貧編集プロダクションの場合

出版業界は1997年以降、業界売り上げが毎年下降している。つまり斜陽傾向にある業界だ。そのため出版社は経費節減のために編集プロダクションを使っている。つまりは外注だ。初月給が13万円、下手をすると賞与ゼロの世界である。つまり年収200万円以下の「貧困層」だ。

編集プロダクションに入る場合は、健康保険、年金ともに自己負担の会社も多いので注意をしたい。大手から中堅出版社の大半は出版健保に入っていて、年金や健康保険については会社がかなりの部分を負担する。

こうした社会保障面だけでない。そもそもが個人経営か、会社組織になっていても創業社長がワンマン経営をしているケースが多い編集プロダクションは長時間労働は当たり前だ。当然のことながら、休暇も少ない。

また、仕事をくれる出版社が倒産したり、担当者の変更があったりすると、仕事がこなくなって倒産の危機に見舞われるケースもある。

「悪いこと」のオンパレードのようだが、下請けなのでいろんなジャンル（雑誌、単行本など）の編集をやるので、仕事を覚えるのは早い。将来の転職へのステップとするのがいいだろう。編プロに入るには、「前向き」な覚悟が大切だ。

◆出版業界雑感

▼書籍担当者の「作家との付き合い」

作家に好かれることが先決だ。競馬が好きな作家だと自分も競馬を覚えて、せっせとつきあうこと。故人の山口瞳の場合は毎週土・日、競馬に付き合わされたらしい。阪東が「週刊新潮」の編集者時代に某先輩が嘆いていた。新潮で「男性自身」というコラムがあったので、その担当になったからだ。土・日、家にいないと家族からブーイングがある。後日、その先輩は妻に離婚を突きつけられたが、この経験が大きな理由にもなっているらしい。

雑誌の連載小説はそのまま、単行本、文庫本になる。「週刊新潮」の場合は池波正太郎の「黒白」「剣客商売」、松本清張の「迷走地図」などが雑誌連載から単行本になった例だ。幻冬舎が「パピルス」という赤字の文芸雑誌を続けているのもそのためだ。

▼マンガ編集者

漫画の世界は、阪東恭一はよく分からない。誰かOBの方、助けて下さい。知っている範囲で話すと以下のようになる。

編集者としては、文芸より原始的だ。マンガ作家の自宅で待機は当たり前だそうだ。マンガ作家が大変なのは編集者が自宅に詰めているので、書けない時にどうやって編集者の目を眩まして逃げるかだ。逃げる手口としては「タバコを買いに行く」「かみさんに言われてゴミを捨てに行く」がある。逃げられると雑誌から「落ちる」ことになり、編集長から怒鳴られるのはもちろん、屑扱いだ。部屋から出さない。タバコやゴミ捨ては自分（編集者）がやることになる。逃げる作家として有名なのは、女性のイラストがうまい某漫画家だ。

賞は、手塚治虫賞などがあるので、新人はそれを取るか、漫画雑誌のアンケートで上位に来れば、つまり人気が出て単行本にした時に100万部売れるなど商売になればそれでいいのである。文学や小説より「地位」が低いのは、その商業主義のためだ。

また集英社などが巨額費用で「新人のタマゴ」まで囲っているので、なかなか、他の出版社が手を出せないのも音羽・一橋グループが独走している理由としてある。作家によっては、ストーリーまで編集者が作っているケースもあるのだ。

▼「クレヨンしんちゃん」

お下品で顰蹙（ひんしゅく）を買い、閲覧が禁止されている国もあるクレヨンしんちゃん（マンガのコンテンツ）。ただし、コンテンツとしては中国（著作権がほとんどない、政府が部分規制している）や韓国など東アジアを中心に、全世界で（ガキに）歓迎されている。ガキにとっては、マンガに「国境」はないのだ。下品（クレヨンしんちゃんは仏西などで悪害図書として禁止されている）でくだらなくておもしろいが、夢がある。絵がきれいな日本の漫画（ジャパニメーション）が世界制覇する日も近いか？

「しんちゃん」以外でも「ピカチュウ」「スラムダンク」「ドラえもん」など無数のマンガが今、世界を席巻している。

「テレビの普及の結果、国民総白痴化になる」（大宅壮一文庫の創設者で評論家の故大宅壮一の言葉）ではないが、出版の世界でも「悪貨は良貨を駆逐する」のだ。

▼エロケイタイ漫画

2010年からiPad、エクスペディアなどで電子書籍が始まった。しかし、すでに日本ではケイタイでエロ漫画を見ている人が多い。それは、すでに数百億円の市場となっている。

▼『1Q84』効果

作品がベストセラーになったり、クレヨンしんちゃん（双葉社の「週刊漫画アクション」連載）のようにヒットすると、その会社の賞与は極端に増えたりする。

2009年の話題は絵本「つみきのいえ」（アカデミー賞作品、絵本は白泉社）や村上春樹の「1Q84」（新潮社）だ。小さな出版社ほどベストセラーになった場合、賞与の額が大きくなる。それは利益を社員数で割った場合、その数が少ないほど一人当たりの金額が大きくなるからだ。

写真週刊誌の「フォーカス」（新潮社、廃刊）は100万部突破した時に、社員全員に10万円の金一封が出た。今度の『1Q84』はすでに200万部を突破したが、いかに!?

▼「噂の真相」の復刊はあるか？

「噂の真相」という雑誌があったのをご存知だろうか？　反権力・反権威スキャ

ンダリズムを標榜していた雑誌で、「ウラを取らないで、記事にする」というすばらしい方針だったが、2004年4月に休刊になった（実質は廃刊）。理由はいくつもの訴訟を抱え、弁護費用や慰謝料の負担が重くなったことにある。

一方、新聞記者や週刊誌記者の掃き溜めだった同誌の存在は大きい。日本はさまざまな宗教団体や過激派（左右の）や巨大な電機、自動車メーカーや電力会社からの「広告」という形での圧力がある。憲法で保障されている「表現の自由」は、皇室問題も含めて「自主規制」という形での制約がある。また、「エセ同和」などエセ人権団体というやっかいな存在もある。

表現の問題もある。看護婦を女性の看護士と表現するなどまどろっこしい表現。ボケ老人、アルツハイマー病は「認知症」。阪東が経験したのは「ダウン症」を「蒙古症」と朝日新聞で書いたら（しかもダウン症の施設建設反対のエゴ住民運動を撃沈する記事なのにだ）、抗議（少し厭味）の電話があったことだ。「白痴」がなぜいけないのか？　わざわざ知的障害や自閉症と言い換えないといけないのか。本音、真実、差別とは違う意味の分かりやすい表現はどうあるべきか、若い皆さん考えて欲しい。

そういう点でも、「噂の真相」の果敢さは懐かしい。今や、記者たちが本音を語る場はなくなってしまった。

▼週刊誌は「新聞蛸壺」論

新聞や放送は影響力があまりに大きいので、よく記者からおさがりの「ネタ」を週刊誌記者はもらうことがある。それぐらい記事にできないことは多い。スキャンダルも基本的に新聞や放送はダメだ。取引して週刊誌記者に渡したり、スポーツ新聞に流したりすることがある。

その代わりに情報源として利用する。芸能リポーターの中にも、そういう放送や新聞の記者とつきあいのある人がいる。芸能リポーターの「老舗」の存在である梨元勝は阪東と親しい。「情報交換」をすることは、視点を逆にすると阪東が「情報センター」になっている場合も。さまざまな事件やスキャンダルについてそういうことがあった。

▼出版社と新聞・放送の違い

出版社は農耕民族型だ。タネ（作家やネタ元の拡大）を蒔いて、時期（必要とした時）に収穫（情報を貰う、賞をやる、連載作家にする）を行う。

新聞や放送の記者の場合は狩猟民族型で、とにかく押しまくり、ネタを強奪する。作家を奪う。朝日新聞のように毎日新聞が主催していた将棋の名人戦を金にまかせて強奪したケースもある。

しかし、一方で専門分野を確立した記者は強い。地方紙などでは、同じ分野（部署）を何回もやる場合がある。日経の友人で、30代でモスクワ特派員として赴任し、また45歳で赴任と計2回、モスクワ特派員を経験するというケースもあった。こうした経験をするためには、記者がこまめに年賀状を書いたりして「秘書」「作家」「官僚」などの「情報元」をつないでおくことが大切だ。これはマスコミに関わるすべての人に共通の事項である。

◆NHK、全国紙記者のすごろく人生

▼NHK

転勤が多く、東京で落ち着いて働けないのがNHKや全国新聞紙の記者たちだ。リーマン・ショックで「一番人気」になったNHKを見てみよう。

記者職だけでなく制作（ディレクター）職、アナウンサー職も地方の支局（NHKは放送局）からのふりだしとなる。まるですごろくのようだ。記者職の場合、例えば福井→大阪→東京や鳥取→広島→東京というパターンになる。地方での仕事ぶりが優秀で、かつ語学ができ、さらに本人が強く志望すれば京都→東京、新潟→東京などのように「直行便」となる。が、これは同期で1人か2人、多くて3人だ。

ディレクター職の基本的な勤務地は東京だ。全ディレクターの半分が東京にいるといわれている。パターンとしては、例えば札幌→北見（北海道）→東京や高松→松山→東京に「上がり」となる。アナウンサーも首藤奈知子さんのように、入社4年以内で東京という「抜擢」はきわめてまれで、一生あがれないアナウンサーも多い。

▼新聞社

読売新聞の場合はこうだ。東京本社に入社すると、例えば秋田、横手（秋田県の地方都市）秋田、東京編成部（整理、紙面を編集する部門）、東京社会部、国際部という異動のパターンになる。

大阪では、読売新聞大阪本社が採用して近畿、中国、四国の各県へ配属（ふりだし）となり、その後、大阪にいったん上がる。

出世していく者は、その後、地方支局のデスク（次長）や支局長となる。SSといって10年生記者が地方にまた、一時赴任（2〜3年）する場合もある。

朝日新聞、毎日新聞は東京本社に本社機能がある。「オール朝日」「オール毎日」といわれる。ただし両社とも大阪が発祥なので大阪朝日、大阪毎日の意識が強い。

したがって福山（広島県）→和歌山→大阪社会部などのように、東京に赴任しない場合もある。

西部本社（福岡、北九州）圏内のふりだしの場合は長崎→福岡→宮崎→福岡→ソウル→東京外信（外報、国際）部、鹿児島→福岡→東京社会部、鹿児島→山口→福岡→東京整理部→福岡運動部などがある。山口県は大阪よりも福岡に近いので西部本社に入る。

また、自分の出身県には赴任することはない。それは「コネ」に頼った取材となるのを防ぐためだ。さらに、新人はどの支局にいくか分からない。ただし、毎日新聞やNHKは新人の場合、希望が通るケースもある。

日本経済新聞も東京に本社機能がある。新人の大半は東京がふりだしだが、1回は大阪、名古屋、福岡、札幌さらに各府県の支局に異動する。

産経新聞も実は、大阪、東京の地方紙だ。大阪は部数が出ていて夕刊があるが、東京にはない。2008年入社の新人はいきなり東京本社へ配属となった。これは県版を統合したためだ。しかし、2009年からはまた県版を一部復活させている。

地方紙（ブロック紙）だと中日（東京）新聞は名古屋に本社機能がある。北海道新聞は札幌に。西日本新聞は福岡にある。北海道新聞は東京支社に出る場合は別と

して北海道内、中日（東京）新聞は東海・北陸、まれに関東、西日本新聞は九州各県の支局がふりだしとなる場合が多い。

県紙といわれる地方新聞は、県庁所在地の本社と県内の地方都市を行き来するが、新潟日報などの大きな地方紙だと、新潟本社整理部→長岡支社→新潟本社文化部→東京支社（ないし共同通信出向）となる。

▼通信社

共同通信は全国の地方新聞、NHK、スポーツ新聞などが出資している社団法人で、地方支局は福島などの特殊な場合を除いて地方新聞社の中にある。

スゴロクも宮崎→秋田→福岡→東京、仙台→秋田→東京、水戸→大阪→千葉→横浜→東京、などさまざまだ。社会部は7年で東京赴任という説もあるが、政治部、経済部だと10年はかかる。毎日新聞、NHK、産経新聞などからの転職者が多いのも共同通信の特徴だ。また、「県版」がないので地方での記者生活は大きな事件がないかぎり「極楽」となる。

同じ通信社でも、時事通信社は「生活」が苦しい。サンケイ「残酷」、時事「地獄」と昔、よく言われた。

戦前、時事は共同通信と同じ「同盟通信」という国策会社で、つまりは「スパイ」会社のようなものだった。戦後、GHQに解体され、現在のようになった。

共同通信とは「客」層が異なる。赤旗（日本共産党）、聖教新聞（創価学会）、商社、官庁、出版社、個人などが中心だが、インターネット社会となって厳しい状況だ。

◆新聞記者の仕事

新人は取材してから原稿を出す部門に配属される。日経や一部の地方紙では整理部に行く場合もある。

支局勤務では警察2年、県政2年、遊軍（専門の担当を持たない）1年のパターンとなる場合が多い。

警察取材が一番厳しいので、最初に配属となる。サツ回り（刑事などの警察官の自宅を夜、取材すること）というやつである。警察署（しょかつ、という）を回るのを「署回り」という。いずれも警察官には「秘守義務」があるので、こう言われる。

テレビでも、記者がよく「登場」する。ただし、どこか違うのでおかしい。正確なのはNHKドラマの「クライマーズ・ハイ」（元上毛新聞記者の横山秀夫の原作）だった。

最初から衛星支局（千葉でいうと船橋、長野の松本、青森の八戸、神奈川県横浜支局の川崎、広島の福山、つまり同一県内の大きな都市）の場合は、警察と市役所など行政の両方を担当する場合がある。

▼免許停止中の運転は免許証あっても無免許運転！？

記者自身も「マスコミ」ネタになる時代となった。これは30年前には考えられないことだ。昔は、新聞記者と警察の「仲」が良く、お互いに不祥事をかばっていたのだ。しかし、インサイダー情報が「告発」「密告者」（インフォーマー）によってばれる時代になった。

マスコミの絶対権力もなくなりつつある。したがって「現場に行くときは」タクシーかハイヤー（本社）、自分で運転していく場合はスピード制限を守るしか方法がない。「駐車禁止除外」のプレートぐらいが、現在の特権だろう。

▼特ダネ記者が出世する

読者にとってはさほど重要でない特ダネも、記者にとっては「取材対象組織」に食い込んでいると「高い評価」がされることがある。とくにインターネット社会になってから、特ダネがないと新聞の役割が薄れる一方だ。特ダネの反対は「発表もの」。これは、どこかの新聞社や通信社が記事にしてインターネットに流れる。

特ダネは取材対象（事件事故なら警察）が認めないかぎり、他社の「後追い」ができないものだ。特ダネだけでなく「おもしろい連載」ももちろん重要だ。しかし、日常のルーティン・ワークの中で、警察などから事件の特ダネを抜くのは非常に重要な仕事となる。これは県版レベルでも同じだ。

本社に「戻ってから」希望の部署に進めるかの判断も「特ダネ」記者か否かによってくる。とくに警察や役所（国の支部、県庁、市町村役場）の特ダネはおおきな「ポイント」だ。さらに、特ダネは警察などの役所ものだけではない。地元の県での「○○周年」の事故関連の記事や「忘れ去られた有名人」の死亡記事なども特ダネになるのだ。

▼ガンクビ写真の入手方法

紙面を見ていると、事件の加害者や被害者の顔写真が掲載されている。それがガンクビ写真だ。ガンクビ写真の入手方法は、まず写真をもっている順番でいうと①遺族、②近所、③親戚、④写真店、となる。

しかし、遺族は「次の事件事故を防ぐためにも是非、写真を貸してください」などといっても無理な場合が多い。したがって近所を回ることになる。ガンクビ写真の入手は先手必勝だ。したがって、地方では地元新聞がどうしても強い。

理由は通信部網がきめ細かいからだ。その時は記者クラブで親しい他社の記者と、非公式に協力しあったりする。

ただし、運良く一番乗りの場合、アルバムを借りることが可能な場合がある。成人の場合は、遺族や近所で拾える場合がある。子供から大学生ぐらいまでの写真は、小学校、中学・高校などの専属の写真店の作った卒業アルバムの写真を借りる。その際は、拝み倒して接写レンズで抜く。ただし、別人と間違わないように知人や同級生や近所の住民に「裏」を取ることも大切なこととなる。

交通事故で犠牲者（死亡者）が運転免許を持っていれば、警察から入手も可能だ。運転免許証の写真のデータベースがあるからだ。

犯人（被疑者）の写真も運転免許から抜ける場合がある。そうしたことを可能にするためには、日頃からの警察との付き合いが大切だ。また、数人死亡などという事故で、死者が同じ会社なら「会社名」を記事にしないという条件で、会社から「顔写真の提供」させる方法もある。これにはまず、記者クラブで「談合」する、次に所轄の警察の副署長を通じて交渉する、などの手続きが必要になる。

車の所有者は、陸運局（湘南ナンバーなら平塚の国土交通省の陸運事務所）で事故車のナンバーから割れるが、同乗者は割れないことが多い。その場合は警察発表を待つしかない。したがって、すみやかな「談合」が必要なのだ。

◆マスコミで働くために知っておきたいよもやま話

▼親と上司は選べない

バカな上司、うまが合わない先輩はどっちかが異動するまで我慢する。

▼聞き込みは相手を見てからする。お喋りを見つける

「喋らない人にいくら食い込んでも時間と労力の無駄だ」。朝日新聞でリクルート事件を指揮した横浜支局次長（当時）の山本博記者はそう言った。

▼取材相手に食い込む

囲碁、将棋、競馬などの趣味から、刑事訴訟法などの法律知識まで幅広く「知識」はつけておく。相手に合わせて話題を提供する。

警察取材で、相手に食い込む（檀家にすると言う）場合は、子供や奥さんの誕生日を聞き出して、プレゼントを用意するとかする。奥さんを落とせば、自然と亭主（刑事）は落ちる。

つまり、搦手（からめて）から食い込む。また子供の家庭教師をやる。記者は大卒（たまに東大、京大卒もいる）ので小学生の国語・英語・算数程度なら、何でもござれである。まず奥さんを喜ばすこと。

副署長級は単身赴任が多いので、夜は自宅で囲碁や将棋をやっている。間違ってもパソコンはやっていない。囲碁、将棋の相手をすると喜ばれる。

▼名刺を100枚持って鞄に入れる。パンフレットのつもりでバラまく

出版社の週刊誌記者の場合、東京が「主戦場」となるさまざまな異業種交流会、マスコミだけの会や政治家、文壇のパーティーがあり、そこに行ってあたりかまわず名刺をバラまき、もらった名刺の人にはお礼の手紙を出す。

枚数が多くなるといちいち手紙を書くのは大変だ。そこで、大学の後輩や弟や妹にあらかじめお礼状を書かせておき、日時と相手の名前を入れれば、3分で出来上がるようにしておく。返事がくれば、それがまず人脈の一歩である。阪東は手紙作戦で、故田中角栄元首相の秘書と懇意になったことがある。

▼検察、警察、役所には名前を売り込む

阪東が毎日新聞時代、某県の警察本部で胸に名札をつけていた記者や、胸が見えそうで見えない薄いブラウスとパンチラのミニスカートで「悩殺」して、サツカンの中で人気が上がり、一気に名前を覚えられた記者がいた。

婦人警官は柔道3段や女子柔道のオリンピック選手だったりする。「閨（ねや）」の中で寝技を使われたら男でもひとたまりもない。よって女子大生の雰囲気の女性記者やディレクターは有利である。ただし、30歳までの限定で期間中のみ有効。

▼マスコミも営利組織の会社である」

したがって、辞令は拒否出来ない。できるのは毎日新聞だけである。これは最高裁の判例で確定している。会社には人事権があり、従業員は従わないといけない。つまり転勤先も配属部署も選べない。希望は出せるが、通るためにはライバル（標準の）の1.3倍は働く必要がある。逆に「優秀」すぎると、その部署から出してもらえない。囲われる。逆に「さぼり記者」は「相手の部署」が引き取らない。

マスコミの人事は基本的には部門間のバーターである。これはメーカーなどの一般企業と大きく違い、人事は一切の権限を持たない。辞令を書くだけの悲しい部署である。あと採用・新人・中堅の社内教育ぐらいだ。

▼居留守を使われたら手紙作戦に切り換える

往々にして居留守を使われる場合があるが、特に相手が（取材を受けることで）不利な場合や「裏付け」を取りたいが一切、インターフォンにも出ない場合などは、手紙を置いていく。相手は必ず読むので、相手に取材に応じた方が得だと説得する。郵送してはいけない。労力を惜しむな。

▼配偶者と子供を大切にしないと早死にする

放送記者や新聞記者、出版社の編集者、放送のディレクターやプロデューサーなどマスコミ人は早死にする人が多い。これは若い時に体を酷使するからだ。また生活が不規則であることもその一因だ。

たとえば、出版社の編集者は締切前は数日間の徹夜も普通だ。さらに過酷なのは放送のディレクターだ。入局して2〜3年はAD（アシスタント・ディレクター。NHKではFD［フロア・ディレクター］）なので労働条件は「奴隷以下」である。弁当やタバコのパシリ（お遣い）やタレント様のその夜の女性の手配までさまざまな雑用を24時間させられる。いくら高給（年収1000万円以上）とはいえ、体はボロボロで結婚しても子供をかかあに生ませることもできない。

かかあや子供にとって亭主は給料運搬人。かかあに仕込まれるのか「おじさん今度いつ来るの？」と子供に言われると、さすがに仕事へのやる気もなくし、つらいものがある。（この点、某社はボーナスのみ社長じきじきの現金支給だったので、この時のみはホクホク顔でかかあに見たこともない料理で出迎えられた）

▼5年たって仕事を覚えてから結婚はする

マスコミ人は整理部、業務部などの定時の仕事をしている部門以外は生活が不規則だ。

とくに社会部など「事件」「事故」「土砂崩れ」など自分の意思とは関係なく発生することにもつきあう（取材する）必要がある。したがって、めったに配偶者に「つきあえない」ので可哀相だ。地方の支局に赴任すると22時ぐらいまでは働かされる。

放送や大手出版社は最初からエンドレスで働く。いくら高給でも時間には変えられない。特に新婚の時や子供の幼稚園の運動会や学芸会に出ないと子供からも恨まれる。若いときの結婚生活が「甘い新婚生活のカケラもないマスコミ商売」では、かかあ（亭主）が泣く。

したがって、大手新聞なら本社に上がってからか、仕事を覚える5年とか最低でも3年過ぎてからの結婚が望ましい。逆に仕事にかまけて35歳とかになると配偶者の相手を見つけることも困難になりかねないので注意だ。

▼マスコミは高給か？

マスコミの高給ぶりは有名だった。少なくとも2008年夏までは。アメリカのリーマン・ショック（アメリカ最大級だったリーマンブラザーズ証券のサブプライムローン証券の焦げ付きなどによる破たん。全米だけでなく欧州、日本も巻き込まれた。1年経たずしてクライスラー、GMなど米自動車大手などが倒産した）の後は悲惨な状況だ。ボーナス4割カット（朝日新聞、日経新聞）が当たり前で、2009年夏の賞与も同様だ。

もちろん、リーマン・ショック以前は違った。もっとも給与が高いのは民放だった。東京キー局など大手放送局などは残業代が青天井（制限なし）の場合もあるが、そもそもの基準内賃金（基本給＋基礎手当）やボーナスが高い。

意外だが、東京キー局よりも番組をあまり作っていない関西キー局の方が給与は高い。ディレクターや記者は1年目から1000万円を超える。

新聞社も朝日新聞、読売新聞、日本経済新聞は推定で、3年目で600万円、10年目で1000万円、20年目で1500万円ほど。北海道新聞などの地方紙（北海道新聞は正確にはブロック紙）も朝日新聞並みかそれ以上といわれる。

しかし、新聞社では残業代は打ち切りだ。出版社も音羽や一橋などでは3年目から900～1000万円という話がある。次に新潮社（矢来町）、文藝春秋（紀尾井町）なども600万円ぐらいだろうか。

しかし、これらの一部の出版社以外は儲かっていないので、社員をこき使うところも多い。そういう会社は未払いの残業代がある。早く労働基準監督署（労基署）が取り締まって、超過残業代を会社に支給させて欲しいものである。銀行や一般企業などでは取り締まりをしている。90年代、新潟の某銀行に労基署が手入れに入った。すると未払いの残業代が発覚して、会社は数10億円分、社員によってはクラウン1台分ぐらいの残業代を支払った。なぜマスコミに対してやらないのか不思議である。

ついでに書いておくが、出版社用語で、「音羽は最近調子悪いね」と言う時は講談社と光文社を示す。それは、両社は資本関係にあり、文京区音羽が所在地なので、そういう隠語になっているわけだ。警視庁の刑事が同僚と居酒屋などで飲む時に、周囲の客に「わが警視庁はおかしい」とは言えないので「桜田商事の人事ももうすぐかな」と言うのと同じである。

一橋と言うと小学館や集英社のこと。江戸時代に水戸藩、つまり一橋家が今の千代田区一橋にあったので、それが地名となり、出版社用語では隠語で両社を示す。一橋グループには雑誌の祥伝社、マンガの白泉社も含む場合もある。

ちなみにフジテレビはコールサインから「CX」、ニッポン放送は「FL」、テレビ東京は「TX」と呼ばれている。

▼転職は3回までというルールがある

放送記者や新聞記者の転職は3回までだ。記者はいわば専門職なので、転職（取材ノウハウや人脈を持っていればの話だが）は簡単だ。転職の書類審査は、記者クラブの仲間がやるので、特ダネ記者か否かはすぐに分かる。出版社の編集者も同じだ。ヒット企画や雑誌、書籍は誰が編集したのかすぐに分かる。作家に食い込んでいる編集者か否かが分かってしまうのだ。

しかし、それも3回までで、4回目以降は難しい。理由は「長続きしないやつ、どこかミスがある、組織に合わない」だけでなく、やはり日本はまだ「江戸時代」なので「殿（社長）や藩（企業）」に一生涯尽くすのが「美徳」らしい。

1年以内に辞めて再就職する場合は、まずマスコミに再就職は不可能だ。「クビになったやつ」と誤解される。したがって、1年以内の転職はあくまで在任中の「ステップアップ」のつもりで目指すこと。それならば相手（採用側）も理解してくれる。特に産経新聞、時事通信など給与の低い会社からの「優秀な人材」の転職は歓迎される。

▼失敗は恐れない

失敗をいちいち気にしていたら、この商売はノイローゼか鬱病になる。 失敗の数が多いほど「経験」を積むことができるのだ。阪東も始末書を何枚も書いたし、停職処分も食らったが、そんなのは特ダネを一発かませば、吹っ飛んでしまう。

だから、みんな血眼になって特ダネを探すのである。もちろん、特ダネは社内では、社長賞、編集局長賞、部長賞の対象である。社報に掲載される。一目（一目は囲碁用語から来ている）置かれる。対外的には新聞協会賞やボーン上田賞を狙うことになる。

唯一の例外が官庁的発想の「天下」の朝日新聞である。メーカーで言うとパナソニックのようなものだ。いわゆる減点主義の会社である。朝日新聞では始末書は減点の対象となり、給与の「基礎点」が減る。始末書が3枚にもなると大きな減点となる。基礎点から給与が決まり、ボーナスも計算するので、同期でも数年で年収が10万円単位の大きな差となる。

▼人権を一番踏みにじっているのはマスコミである

最近、「メディアスクラム」とかカタカナで言うらしいが、昔は一斉に取材相手の家に踏み込み（許可があれば）写真や証拠物を借り（返さないので盗むという表現が適当か）それを基に取材するので、放送記者や新聞記者を信じた者はバカを見る。写真週刊誌や放送ではホームビデオや写真まで取っていくことがある。もちろん遺族や家族の許可がいるが、自分が取ったホームビデオが堂々と全国に放送されるとさすがに貸した方は後悔するらしい。テレビ放送と書きたい放題の記事で、被害者の人権も結果的に損なわれる。

加害者の場合は言うまでもない。「社会的地位を抹殺する」（裁判では社会的な制裁という表現が使われる）ことで、「殺人」と同様の行為をするのがマスコミである。

▼嘘は政治家と社長の始まり、泥棒は記者の始まり

政治家や一般企業の社長は、取材に対してまだ発表する段階でないとの判断や「企業秘密」を楯に堂々と嘘をつく。例えば、次期市長選に出馬するのはみんなわかっているのに本人は否定する。旧住友銀行の頭取で、身内がらみの不祥事で失脚した磯田さんという人は、経済担当の記者仲間から「ウソダさん」と陰口されていたのも有名な話だ。

泥棒は記者の始まりも同じである。取材相手の郵便箱から手紙を抜き取り、上手に開封してコピーして「証拠」品にしてしまう。宮崎勤事件（正確には東京・埼玉

連続幼女誘拐殺人事件。1989～1990年にかけて起きた連続幼女誘拐殺人事件）では、宮崎被告の父親は当初はまったく息子を疑っていなかった。そのため、警察が非常線（立ち入り禁止のテープ）を張る前だったということもあり、押しかけた地元記者クラブの記者が父親を説得して宮崎容疑者の部屋に入り、写真を撮った上で、手紙、アルバム、名簿、（子供を殺害した時らしき）ビデオテープを某社以外は取っていった。某社とは朝日新聞のことである。

それは、宮崎被告がまだ逮捕される前に「今田勇子」の偽名で、朝日新聞社東京社会部に「犯行声明」を送ってきていたからだった。これは記事になっている。実は、この声明の文書が犯人かどうかの決め手になった。つまり、いたずらの手紙でないことがわかったのは、誘拐して殺した幼児のポラロイド写真が封筒に同封されていたからだ。

阪東は当時、警視庁多摩地区の担当記者だったので、デスクからその手紙のコピーと写真を渡されて、「探してこい」と過酷なミッション（命令）を受けていた。たまたま、被告の逮捕時は第5の殺人事件は起こりそうもないな、という時期で甲子園に高校野球の取材に行っていた。

結果的に阪東は泥棒にはならなかったが、もし私がその場所にいたら当然やっていただろう。しかし、私の代理の警察担当はまじめな人で泥棒をしなかったのだ。そのため、宮崎逮捕後の報道は、朝日新聞は完全に「負け戦」（抜かれっぱなし）となった。捜査もそうだが、取材も初動取材が大切である。ついでに言うと、この宮崎被告の逮捕は警視庁八王子署の発表の1週間前だった。警察も「やさ男」で「地元有名人の子弟がまさか」と思っていたらしい。特ダネは産経新聞と言われている。産経新聞が夕刊（当時、東京本社版では夕刊があった）に書きかけたので、例の「記者クラブ」の圧力により、正午の発表（つまり夕刊に各社間に合う）となった。産経新聞に抜かれたら、他社の記者たちは「クビ」になる。次の人事異動で僻地の通信部（1人の支局）や整理部（紙面のレイアウトをする部門）への異動が間違いないからだったのだ。

▼警察は国家権力か①

警察は国家権力である。絶対に喧嘩をしないことだ。喧嘩をするのは、「特ダネをものにしたい」場合に限る。普段は、あくまでも「脅す」ことに留める。また警察に「非」がある時や、どうしても利用したい時は、記者クラブで新聞各社の記者と談合して「脅せ」ば、相手は文句を言えない。マスコミが結託すると、ろくなことがない。

逆に胡麻すりは「100利益あって1害なし」なので、胡麻すりに徹することだ。

▼警察は国家権力か②

阪東は天才漫画家と評価している赤塚不二夫氏の「天才バカボン」のファンである。なぜなら、ピストルを撃ちまくる。でべその交番の「お巡りさん」がいつも「国家権力をバカにするな」と言う台詞があるからだ。漫画なので、ピストルで人は死なないが、赤塚氏はよっぽど警察が嫌いなのか、よくこの台詞を漫画で登場させている。

漫画ではギャグだが、そこは天才赤塚氏、実は真相をついている。阪東も昔、酔っぱらって民間人と喧嘩をして、23時から朝の6時まで事情聴取をされて（酔いがさめて示談となったので、そこで終わったが）、なぜか喧嘩相手と2人で地域課長の前で謝らされた。

▼朝日は3人寄れば人事の話

「朝日新聞の記者が3人集まれば、人事の話をする。毎日新聞の記者はカネの話。読売新聞の記者は事件の話」というのは20年前の業界内輪話だ。ついでにNHKは「日本薄謝協会」と言われ、（昔は）テレビに出たいという、出たがりしか入社しなかった。また「サンケイ残酷、時事地獄」というのもある。これは人使いの粗さや給料の安さ（朝日新聞や読売新聞や日経新聞や大手放送局に比べて）を意味する。

▼警察は国家権力だが身内と政治家には弱い

記者は警察官のあることないことを副署長や署長、本部の刑事部長に「告げ口」してチクチクといじめるので、警察官も「丁重」に扱ってくれる。警察からは、政治家（国会議員、県会議員）や署長などの幹部の子弟も「丁重」に扱われる。政治家は、何と言っても警察予算（警察は都道府県議会の予算事項）の承認をしてくれる人であり、国会議員は警察関連の法律を通してくれる人だからだ。

▼放送記者や新聞記者には「記事にしない特権」がある

ニュースのネタはあまりに多い。事件だけではなく、世の中の動きがすべてネタになりうるからだ。県版では、書いても書いても書き足りないほどだ。しかし、ニュースの価値を選別して「ボツ」にするのは記者の特権だ。書かない方が「人権」を守れるなどの場合はもちろんだ。かっこ良く言えば「ニュースの裁判官」である。

阪東の経験では、ピースボートの学生が北朝鮮ツアーの「売り込み」で朝日新聞に来た時に、ボツにしたことがある。「ピースボートは商売だろう。なんで（早稲田大学の後輩の）辻元清美（後に衆議院議員）の儲けのために天下の朝日新聞が書かないといけないんだ。辻元に言うとけ。2度と朝日新聞に来るな」と追い返した。

ものによっては、「書かないこと」も大事なのだ。また、サツカンが立件、検察が見送った事件にも注意が必要で、書いたら「調査報道」になって、責任が全部のしかかってくることもある。

リクルート事件のように適用する法律が整備されていない場合は、キャンペーンで法律を小役人につくらせればいい。それができないという場合は、「賄賂」「脅し」を受けていることが多いので、また記事にすることができる。まるで、「一粒で二度おいしい」グリコのキャラメルである。

また、別の理由で「記者レベル」でボツになることもある。デスクにもあげない。「良い記事」であれば取材対象者は喜ぶが、逆の場合は「激怒、絶望、人間不信」になる。こちらが問題なのだ。そういう記事はデスクは喜んで使う。しかし担当記者はたまったものではない。

阪東が新潮社を辞めた理由の一つは、スキャンダル記事（もちろん特ダネ）で「本名」「国籍」「前科」をバラして、「自殺」「社会的生命」「名誉」「家庭破壊」に追いやったケースがあったからである。こんな生活をしていては、「畳の上で死ねない」と思ったのだ。

さらに、こんな「ボツ」もある。サツカンとの取引や役人、政治家との「取引」だ。これは、「スキャンダル」をネタに「別のニュース」をもらうものだ。

かつて、国税庁の「汚職記事」のボツと引き換えに「山口百恵や竹下登の脱税」の記事が某朝日に掲載されたことがある。1月ごろの「確定申告」の時期に、わざと「汚職」ネタをちらつかせて、東京ならば東京国税局の「広報専門官」(一級署長級)を「脅す」のである。確定申告前に「汚職記事」が出たら、全国の税務署員が一般国民から「一斉に」窓口で怒鳴られたり、苦情を言われたりして、大変なことになる。

ついでに言っておくと、ノルマが厳しく「自殺」が多いのも税務署である。

アメリカで100年前に、すでにマスコミの役割について書かれた名著「世論」(岩波文庫)がある。著者のウォルター・リップマンは「広報は会社や役所の宣伝であり、世論を操作するために、自分の会社の製品を売り込むためにある」と「看破」している。また「パパラッチ」などの芸能政治新聞や雑誌について、何が「大衆」を喜ばすかがマスコミの役割と見抜いている。

社会的な犯罪、歴史に影響を与える史実の発掘などのスクープ記事は別として、単なる幼稚園のもちつき大会、ジジババの書道展、NPO(非営利組織、「週刊新潮」的に言えば慈善行為の押売団体)など、どうでもいい行事を記事にするか否かは現場の記者の判断である。

また、裁判官の判決に成績をつけることで、どうでもいい判決は記事にしないのも記者の特権である。ただし、警察発表はできるだけ載せて、恩を売る。すると発表しない「裏の特ダネ(記者にとって、つまりは大衆が喜びそうな)」をかすめ取ることができるのだ。

逆に、記者に対して裁判官や検事は「ジェラシー」を感じつつもバカにしているので、取材はしにくい。マスコミなくして、彼らの「仕事」は世間に伝わらないのにだ。

▼インターネットと出版社、新聞社

今やインターネットの広告費(売り上げベース)は、2007年にラジオ広告費と雑誌広告費を抜き去った。新聞社の広告費がインターネットに抜かれるのも近い日だといわれている。広告に関しては、雑誌、新聞は青息吐息の状態だ。

おまけに新聞は若年層の購読が減少しており、年寄りが全滅するまで部数はゆるやかに減り続けることになるだろう。しかし、NIE(Newspaper in education)を小学生や中学生に義務化して中学入試、高校入試に必須科目にすると、寿命は少し伸びるかもしれない。本にしても、現在小学校では朝に読書の時間を設けており、将来は活字離れに歯止めがかかるかもしれない。レコードからCD、そしてダウンロードへ。さらにはタワーレコードの崩壊という、音楽に見られるような「ビジネスモデル」の崩壊(瞬時の、10〜15年での)はないだろう。

こうしたビジネスモデルの変化とは別に、いずれにせよ取材は「ロボット」にはできないことだ。どこまでいってもアナログなのだ。活字媒体にせよ放送にせよ、記者は必要なのである。

また、インターネットや大手新聞、ワイドショーを含めた民放テレビのニュースの「対象にならない」くだらない記事を載せる地方紙の需要はあるかもしれない。

具体的には、岩手県を例に挙げてみよう。盛岡の岩手日報は県紙、岩手日々新聞は一関(宮城との県境の一関市)の地域紙となる。しかし、岩手北部は江戸時代に南部藩だったので青森山田で有名な八戸の「デイリー東北」が占めている。そういう地域では、「赤ちゃん誕生、結婚おめでとう、おくやみ」などの「細かい」情報は、地域新聞にしか掲載されない。口コミベースなのでインターネットはまったく関係ないといえるだろう。インターネットは全世界相手の「オタク」「趣味」「大事件の速報」には向いているが、その逆には不向きだ。

それにしても、「結婚欄」のある岩手日々新聞を目にしたときには驚いた。岩手日々を意識しているのか、はたまたその逆か、県紙の岩手日報もそうだ。英国のTIMESの「社交欄」(もっともあちらは上流、貴族階級用だが)然り。

▼役立つ役所①　法務局

土地や建物の所有者や大きさを知るためには、法務局(登記所とも言う)で調べることができる。個人保護法とは関係ない。理由は公正な取引のためにある。土地と建物の両方に登記がなされる。最近ではデジタル化している。一部ではまだ、いくつかの登記を束ねて本の形をしているので、対象者以外のも見ることが出来る。

何のために重要なのかは、取材対象がどれぐらいの土地や建物を持っているのかを知ることができるからだ。

もっと重要なのは、相手(所有者)に借金がある場合だ。土地や建物を担保に借入れしている場合は、登記簿の「乙」欄に記載されている。その中には住宅ローンも含まれるが、実業が銀行から資金を借りている場合も「根抵当」と言われる借入限度を限定した担保もある。

さらに、複数の土地を持っている場合は登記簿の「付票」を取り寄せる。すると、銀行から例えば10億円の金を借りる時に、どの土地を全部、担保にしているのかがわかる。つまり「付票」から調べたい相手の土地がどこにあるのか一網打尽で調べられるのだ。

近年では毒カレー事件の林真須美の例がある。約100坪の土地の正確な広さや本当の所有者の名前、過去の所有者の名前がわかる。被告の家や土地がどのようにして買われたのか、土地を担保にいくら借りていたのかも調べることができる。

法務局のもう一つの役割は企業の登記だ。社長や取締役が誰で、資本金や会社を設立した年度などがわかる。登記上の本店が、基本的に納税する場所でもある。全国にいくつも「本社」「支社」がある場合がそうだ。

暴力団の関連企業などの役員の名前を調べることもできる。そこには役員の住所も記載されている。

地味な仕事で、1回で400円前後の費用がかかる。しかも午前9〜11時、午後は1〜3時までなので、常に混み合っている。

▼役立つ役所②　消費者センター

知りたい情報があっても個人情報保護を盾に正面からは教えてくれない場合が多くなった。しかし、2005年以降、タイヤの脱輪、ソニーのリチウム電池の発火、パロマの湯沸かし器や松下の石油温風機の不備によるCO(一酸化炭素)中毒などPL(製造物責任)法に引っかかる場合や詐欺商法などについて苦情の窓口となっている。消費者センターは、市町村レベル、都道府県レベル、国レベル(内閣府、

旧経済企画庁）の三つの段階で存在する。

こまめに回っていると、役人が情報を教えてくれるようになる。それは消費者センターの「存在価値」をアピールまたは、宣伝できるためだ。もっと言うと「振り込ませ詐欺」のように、これだけ話題になっていても引っかかる「市民」がいる。それだけに、マスコミを使った「防犯意識」を広めるためにも重要な役所といえる。

警察では、セイアン（生活安全）課などが情報を握っているが、事件として「立件」までは教えてくれない場合が大半だ。詐欺などはことさらである。

阪東は朝日新聞記者時代に、多摩の消費者センターで松下の洗濯機の脱水機の事故を取材して特ダネ記事にしたことがある。主婦が指2本を失った。止まっていない脱水機の中の洗濯物に手を入れたためだ。今はこの事故を契機に「脱水機が完全に止まるまで手を入れないで下さい」というステッカーが張られるようになった。このステッカーは業界団体が定めたものだ。

記事で世の中が、少しだが変わることもある例だ。記事として残る新聞社の役割は大きい。

▼捜査四課（警察の組織）

警視庁など大きい警察では刑事部には捜査一〜四課がある。一課は殺人強盗などの「強行犯」、二課は知能犯や汚職（汚れるはサンズイなので汚職事件はサンズイと言う）、三課は窃盗など泥棒、四課は暴力団がらみを担当する。

青森県警などは一と三を合わせて一課、二と四を合わせて二課と呼ぶ。また、汚職事件（サンズイ）は地元警察では「しがらみ」が多いので、課長は警察庁から若い20代後半から30代のキャリア（東大、京大卒など、国家公務員Ｉ種、旧上級職）が東京から赴任してくるケースが多い。キャリアは、警察で言うと県警の警務部長（ナンバー2）、と本部長（ナンバー1）が占める場合が多い。小さな県警（総職員数2000〜3000人）の本部長は40代前半のキャリア組がなる場合が多い。

▼警察の階級

笑い話のようだが、警察の官舎で子供同士が喧嘩すると親の階級が上の子供が勝つ。それぐらい年齢に関係なく階級がすべてなのが警察だ。自衛隊や消防署も同様だ。

マンガの「こち亀」こと「こちら葛飾区亀有公園前派出所」の場合を例に取ると、両津勘吉は巡査長で、中川や麗子より階級は一つ上だ。中川や麗子は巡査で1番下の階級だ。大原部長は正確には巡査部長で両津より1つ上の階級、「部長」と言っても上場企業の部長とはわけが違う。巡査部長の上は警部補（これは「こち亀」には登場しない）。その上が警部だ。警察署所（しょかつ）轄で課長は警部の場合が多い。副署長や「こち亀」の本田署長は警視となる。警視庁など大きな県警での署長の1割から2割はその上の警視正（「けいしせい」と呼ぶが、「けいしマサ」と隠語で読んでいることも）となる。

警視正まで来ると高卒のお巡りさんにとっては高嶺の花で、1000人に1人しかなれないという競争率だ。退職金や天下り先だけでなくOB会での扱いも違ってくる。

▼名誉の特進

死んでから「昇進」する場合もある。名誉の殉職なら2階級特進の上、退職金をあげるのである。

外務省でもイラクで死亡した奥氏（早稲田大卒）も大使の下（たぶん公使）だったがゲリラに殺害されて、「大使」になった。

亡くなってから大使になっても仕方ない。阪東はそう思う。しかし、遺族にとっては名誉である。

お家の名誉という言葉は古風だ。これは江戸以前の「お家」制度が根本にある。お家の名誉は個人より優先された。また親戚の失脚は「連帯責任」を取らされることもあった。また家を守るため、婿や嫁を他の家からとる、つまり入り婿、入り嫁を行い「家」を継がせる場合もあった。戦後は民法改正によって、法律的には家督相続制度はなくなった。しかし、まだ父親が死亡した場合は長男に財産を集中させる「家督」は農家などに多く、いまだに行われている地方もある。

叙勲（形は天皇陛下からの地位の遠近、実際は官僚が政治家や大手企業や業界団体に圧力をかけるための道具になっている）と同じく、名誉や地位や階級は残っているのが現代ニッポンの姿でもある。これらの制度は、古くは平安時代から明治維新以降の天皇を頂点とする近代的な国家体制でも受け継がれた。ただし、貴族制度だけは、日本国憲法によって戦後廃止された。

ついでに言えば、日本は立憲国家で国家君主は天皇だ。ロシアやフランスのように革命で国王や皇帝一家を皆殺しにした場合は共和国で、大統領が君主となり外国の大使の認証などの「雑務」もする。日本や英国、スウェーデン、オランダ、タイなどの国王が存在するところは大使の認証は君主である国王（天皇）が行う。

▼サツ回りと署回り

サツ回りとは警察官の自宅を回ること。留守の場合は家の前に車を停めて根気よく警察官の帰りを待っている。できれば目的の警官の奥さんと親しくなっておく。また、誕生日にプレゼントをする。さらには、子供の勉強の面倒を見たりする。しかし今は、マスコミとの接触には厳しくなった。

そこで署回りをすることになる。日本で最初にポケベルを持ったのは、1980年代の警察官と消防署員とマスコミと暴力団だ。つまり、「事件」「事故」「火災」「トラブル」「抗争」はいつ起こるかわからないのだ。そのために、警察官と消防署員とマスコミは当直勤務をする。地方の支局では携帯電話出現のおかげで、当直なしの場合もある。

その当直をしている警察署に19〜22時ごろ、回るのが署回りだ。何か情報がないか？　事件はないか？　と言って、警察署に入っていく。たいていは当直主任という課長級（警部）がいて対応する。しかし、それ以外の署員との雑談も大切だ。当直は各課から駆り出される。捜査や生活安全、交通、地域（交番を担当）などさまざまで、そこで名前と顔を売っておく。親しくなれば、刑事の場合は自宅の方向を聞いておく。これは新人、とくに女性記者にとっては有利である。すべての警察署が年がら年中忙しいわけではない。「恋人をくどくように」こまめに回ることが大切だ。

署回りで親しくなれば、その後の刑事や刑事課長のヤサ(自宅)回りも可能になる。警視庁や千葉、神奈川、埼玉などは官舎があるので、ヤサの特定もしやすい。署長や副署長は官舎に住んでいる場合が多い。

▼他社と仲良くする①……結婚したら早く子供を

特ダネの逆がある。特オチである。自分の会社の紙面で重要な記事が掲載されていない。特に地方版（新人は大手新聞では5年の研修期間として地方の県庁所在地などに赴任する）で多い。記者クラブで自分が不在の時に、他社が談合して「あいつをはめよう」ということで、教えてもらえなかった結果だ。したがって、翌日の朝刊に自分の新聞社の紙面に記事がない。だから仲良くするのだ。本当の特ダネは黙ってコソコソと取材して書くのである。

しかし、B級の特ダネで「復讐」されることもある。

他社の先輩からも教わることが多い（自分の会社のデスクは教えてくれない時）。しかし、あまり付き合いが多いと家族不和の原因になるので要注意だ。

あるとき他社の記者たちと懇親会と称して飲んでいた。独身ならいいがかかあ持ちだとこの後が大変だ。家に帰ると、かかあ（妻）が「遊んできたわね！」と怒るのである。

そうならないためには、結婚したら早く子供を作っておくことだ。すると、妻の目は記者である夫ではなく、赤ちゃんの面倒で亭主どころではないので、実に助かる。実家に帰るかかあが多いので、余計に「独身気分」を味わえる。また、独身よりも若い妻持ちの男の方が芸能界だけでなくモテるのである。女も他人の物を奪いたい欲望があるのかもしれない。逆に、男性のデスクが、大学卒業したての新人（女子のみ）を可愛がり過ぎて愛人にしている例も、あまたある。

▼他社と仲良くする②……田舎での大きな事件

先日、あるOB・OGから他社の新人と「範囲が広いので、地取り取材を2人(社)や3人(社)で分担した」という話を聞いた。取材が広範囲になれば時間に追われることになるからだ。これは阪東100本塾のOB・OGだったから当然のことなのだ。

北海道では、ネット心中の車の写真を撮るのに3社で共同してやったというケースがある。車の場所が山奥で林道も多く大変なので、分担したそうだ。

たまたま、ある社の1人が懐中電灯（100円ショップで売っている）を持っていて(車に積んであって)、他にも磁石や詳細な地図を持っていたので重宝したという。それら以外では、ガラスを割ったり、シートベルトを切ったりする器具（本来は脱出用）を装備しておくといいだろう。

話を戻す。その懐中電灯のおかげで50メートル先の1ヶ月前から行方不明だったネット心中の車を発見して写真が撮れたそうだ。

季節ものの写真、例えば各社の日光支局（栃木）では毎年交代で山を登り、ニッコウキスゲや華厳の滝の氷結の写真を1社が撮りに行く。首都圏や関西ではなかなかうまくはいかないが、「談合」もたまには必要なのだ。

阪東も毎日新聞記者時代に5人死亡の交通事故があり、他社（市川署に詰めている会社だけ）と組んで副署長を脅したことがある。事故で亡くなった会社の社長に電話させ、社名を伏せる代わりにガンクビ（顔）写真を提出するようにさせたのだ。このときは見事に同着だった。この事件は、同じ会社仲間の若者がカーブを曲がりきれず、たまたま違法駐車のトラックに激突、全員即死というもの。ガンクビ写真は社会面に掲載された。

▼同業他社の恋人とは「できちゃった結婚」を

はっきり言って、結婚する女性の給与が自分よりも高ければ「主夫」になる方法もある。もしくは出来の良い方が世帯主になる。社内結婚ならどちらかを異動という会社の配慮も期待できるが、他社の相手との結婚は「閨（ねや）」の中で寝物語で「リーク」されたら大変だ。

10年前に関東のある支局にいたときの話だ。NHKと共同通信に勤めるカップルの結婚で、NHKに勤める方が辞めて、あちこちと夫の転勤につきあったが、「子供ができず」暇なので某ブロック紙に元NHKの妻が転職した。もともと妻の方が優秀だったと、クラブでは評判だった。不幸にも現在、夫は東京に、妻は仙台で別居結婚となっている。

そう考えると、結婚する時は、「できちゃった」結婚が理想的だ。猛反対していた親も、「孫」の顔を見るとコロッと変わるものだ。たとえ結婚式に出ないような頑固な親でも。

▼役人は国家権力ではない。政治家の召使なので、叩きまくる

かかあや上司にいじめられたら、役人のミスや不良行為（シミ）を捜し出して怒鳴りまくるが記事にはしないのもストレス解消のコツだ。

▼うそ電話取材作戦

企業や役所の広報に電話で取材を申し込むと、つまらないことでも「企画書」（目的、日時、時間、相手、何日の紙面、番組で使うか、カメラマンは来るのかなど）を出せという場合がある。

悪質な例には、早稲田大のように地方の支局からのアプローチでも電話取材に応じず、新宿の早稲田大学本部まで「来させる」横柄な「企業」もある。まったく出張費や時間が無駄である。

したがって、この場合は嘘（うそ）電話が有効だ。大抵のことはホームページを見るのが基本だが、それ以外のことは「嘘電話作戦」を使う。

例えば、さっきの早稲田大の例なら、早稲田のOBのふりをして、例え嘘であっても横柄に堂々と、「卒業生のものだが、●●の件はどうなんだ」とか、「ある新聞でこんなけしからん記事が出ているがどうなのか」と他紙に抜かれた場合には電話する。「新設の学部はできるのか」とか「付属小学校（早実）の寄付金300万円は今もいるのか。バカの奥島前総長の責任はどうなっているのか」と言うようにする。

名前を聞かれたら、友人の早稲田OBの名前（学部と卒業年次）を用意しておこう。早稲田OBは100万人以上いる。名簿はパソコンに入っているが、いちいち電話された時に確認作業は不可能だ。この方法は日大（推定約150万人）、慶應義塾大（推定約70万人）や東海大、東大、京大などマンモス大学だと有効だ。

また、花王に「靴下の匂いを消す洗剤みたいなものはあるか。ニュービーズという洗剤はさっぱり効かない」とクレームをつけるふりをして、お客様への対応センターなどに電話する。この場合は「客」なので「丁寧に」答えてくれる。花王など大手では、センターの対応職員は、商パソコンから過去のクレームなどの記録をすべて見ながら答える。それを利用するのだ。「大毎朝新聞だ。答えろ！」では広報はかえって警戒して、「事実隠し」に走る。

役所にも「一国民、一市民として」、行政の内容を聞いたりする「権利」をどんどん使おう。マスコミを名乗った瞬間に「広報におかけ直し下さい」と言われて終わりだ。

ただし、正式な取材の場合、不祥事のコメントを取る場合は「社名」を名乗ろう。

◆最後に

みなさん、最後まで読んでいただきありがとうございます。これは「週刊新潮」、毎日新聞、朝日新聞の記者生活の中で自身の経験（体験）から書き記したものだ。主宰しているマスコミ就職塾の教え子の「データ」も参考にしている。

マスコミ塾18年間で約530人、NHKの36人を筆頭に、ほぼすべてのマスコミにOB・OGがいる。教え子の中には死んだ方、退職した人もいるし、バリバリのエリートとさまざまだ。マスコミに入らずに銀行、メーカー、官庁へと進路の舵をとった者もいる。

最近では、新人となった教え子から仕事のノウハウなどを聞かれるようになった。阪東が新人だった30年ほど前は、「こんなものは、自分で先輩（自社、他社の）から盗むものだ」と、言われていた。

人脈についても、朝日新聞の社会部記者時代、異動の際にも引き継がないのが慣例だった。今思えば、自分が苦心して開拓した人脈は同じ会社でも引き継がない、という「朝日新聞的なルール」だったのだろう。

しかし、今の学生は大学進学前から予備校に世話になり、手引きに慣れっこになってしまっている。資格取得についても、司法試験や公認会計士などさまざまな予備校に通いながら合格を目指している。さらには、公務員試験でも予備校がある。

私の塾でもそうだが、全員とまでは言わないが、しっかり受講してもらえば8割ぐらいの確率でマスコミや大手企業には入れる。資格も頑張れば取得できる。しかし、TOEICで700点もある人が実践で使えるかというとそうとはかぎらないのだ。

まして、入社試験や公務員試験、資格試験に受かっても、さらに研修で習うことは多い。しかし、それがすぐに現場に生かされるかといえばNOだ。結局はOJTとぶっつけ本番となる。そこで「苦労」する。苦労のあまり、「初心を忘るべからず（忘れるな）」をすぐ忘れる。某新聞社では、新人が1年に2〜3割が辞める時代である。

これは会社にとっても、本人にとっても「損失」である。ましてや「精神的なダメージ」で、社会人としての常識がなくなる人もいる。自殺者もいる。

しかし、マスコミの仕事や生活ぶりをあらかじめ知っておくことで、いくらかは「苦労」が少なくなるはずだ。

取材と営業の仕事は似ている。9割が重なるといってもいいだろう。したがって、本章は営業で苦労している方にも役立つと思っている。

マスコミ志望の方には実態を知ってもらいたいので、内定してから是非、読んで下さい。内定前に読むと失望するので読まないこと。

次ページからの「知らないとおじさんに馬鹿にされる覚えておきたい昭和・平成重要事件年表」はぜひ、面接対策で活用してほしい。歴代首相やオリンピック開催地は常識問題としてよく出題されるので、覚えておくと役立つだろう。

知らないとおじさんに馬鹿にされる

覚えておきたい昭和・平成重要事件年表

1936（昭和11）年	• ベルリン五輪。
1940（昭和15）年	• 世界情勢の悪化により東京五輪が幻に。
1941（昭和16）年	• 日本軍、ハワイ真珠湾奇襲攻撃。英領シンガポールを占領するなど太平洋戦争に突入。
1944（昭和19）年	• 世界情勢のさらなる悪化でロンドン五輪中止。
1945（昭和20）年	• 硫黄島で約3万人、沖縄での地上戦で約20万人の軍や民間人が犠牲に。米軍にも多数の死傷者が。 • 米トルーマン大統領が広島、長崎への原爆投下を決断。8月15日、連合軍に対して、日本が無条件降伏。 • 東久邇内閣発足。
1946（昭和21）年	• 第1次吉田茂内閣発足。
1947（昭和22）年	• 片山哲総理の誕生で日本社会党・ 民主党などによる連立内閣発足。 • 日本国憲法施行。
1948（昭和23）年	• 芦田均内閣発足するも、昭和電工疑獄で総辞職、第2次吉田茂内閣発足。 • 戦後初の五輪がロンドンで開催。
1949（昭和24）年	• 毛沢東率いる中国共産党が蒋介石の国民党との内戦に勝利、独立宣言。国民党は台湾に逃げる。 • 湯川秀樹博士に日本人初のノーベル物理学賞。
1950（昭和25）年	• 朝鮮戦争勃発。金日成率いる北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）軍が韓国（大韓民国）に宣戦布告。北軍は南軍をプサンまで追い詰めるが、アメリカの参戦で南が巻き返し。その後は中国が参戦して、結局、38度線を境に1953年に休戦、事実上終結。日本は松下電器をはじめとして大手企業がこの戦争による特需で業績を一気に回復した（朝鮮特需）。
1951（昭和26）年	• 吉田首相がサンフランシスコ講和条約に調印、日本が正式に独立。
1952（昭和27）年	• ヘルシンキ五輪（フィンランド）、日本が戦後初の参加。 • 手塚治虫の漫画「鉄腕アトム」がスタート（アニメ化は1959年）。

1953（昭和28）年	• 小津安二郎監督の「東京物語」上映。 • 水俣病患者第1号。 • 奄美諸島日本復帰。
1954（昭和29）年	• 黒沢明監督の「七人の侍」「山椒大夫」がベネチア映画祭で銀獅子賞に。 • 水爆大怪獣映画「ゴジラ」公開、「二十四の瞳」など日本映画が黄金時代へ。 • ホーチミン軍が、ベトナム北部のディエンビエンフーで仏正規軍を撃破。ベトナムは南北で分裂して独立。以降、米が南ベトナムを支援、ベトナム戦争に突入（1975、サイゴン陥落で終結、南北ベトナムが統一）。
1955（昭和30）年	• 自由党と民主党が保守合同、左右社会党も統一。日本共産党も野坂、宮本体制のもと議会主義に転換、いわゆる「55年体制」に。 • NHKが衆議院選挙開票速報をはじめて実施。街頭テレビがブームに。
1956（昭和31）年	• メルボルン五輪（オーストラリア）。 • 『週刊新潮』創刊、この後、週刊誌ブームに。 • 鳩山一郎（自民党の鳩山邦夫前総務相、鳩山由紀夫民主党党首の祖父）内閣の後任の石橋湛山が首相に就任。が、翌年2月に病気で辞任。岸信介内閣発足。
1957（昭和32）年	• 王貞治の早稲田実業が選抜高校野球で優勝、優勝旗が初めて箱根を超える。 • 長嶋茂雄の立教大学が東京六大学野球で4度目の優勝。 • ソ連が人工衛星スプートニク1号を打ち上げ成功、全米がパニックに。
1958（昭和33）年	• 放浪画家山下清をモデルとする映画「裸の大将」公開。
1959（昭和34）年	• 皇太子（現平成天皇）、美智子さまとご成婚。 • キューバ革命、チェ・ゲバラ来日。 • 伊勢湾台風で約5000人の死者、被害家屋57万戸。 • 『週刊少年マガジン』、『週刊少年サンデー』創刊。
1960（昭和35）年	• 60年安保。 • 岸信介首相（安部晋三元首相の祖父）退陣、池田隼人内閣に。 • 社会党の浅沼委員長が日比谷公会堂で少年右翼・山口二矢に刺殺される。この刺殺写真で毎日新聞が初のピュリツアー賞に。 • ローマ五輪開催。日本、体操男子団体総合で初優勝。
1961（昭和36）年	• ソ連が初の人間宇宙衛星実験に成功、ガガーリン少佐「地球は青かった」が流行語に。 • 黒沢明監督の映画「用心棒」公開。

1962（昭和37）年	• キューバ危機。あやうく米ソの全面核戦争に。 • 勝新太郎（中村玉緒の夫）主演映画「座頭市物語」がヒット。
1963（昭和38）年	• 熊本の三井三池三川炭鉱事故で458人死亡。いまもCO中毒の患者が。 • 旧国鉄東海道線の横浜・鶴見で二重衝突事故、161人死亡（戦後最大の鉄道事故）。 • 米ケネディー大統領がダラスで暗殺される。ジョンソン副大統領が自動的に大統領に昇格。
1964（昭和39）年	• 東京オリンピック開催。「東洋の魔女」女子バレーや体操男子団体総合優勝など金16、銀5、銅8で米ソに続く3位に。 • 戦後最長の佐藤栄作内閣発足。 • 東海道新幹線開通、名神自動車道や首都高速も。 • 国産旅客機YS11が初飛行。 • 平凡パンチ創刊（平凡出版、現マガジンハウス）。
1968（昭和43）年	• 東大闘争（山本義隆議長）、日大闘争（秋田明大議長）に端を発し、翌年にかけて全国の大学に大学闘争が波及。 • パリ5月革命。 • 三億円事件（東京・府中の東芝府中工場にボーナスを運んでいた現金輸送車が偽白バイの男に強奪される（当時は給与、賞与は現金支給だった）。1975時効未検挙事件に。 • 永山事件（北海道網走生まれの永山則夫（19）が4人を連続射殺、翌年逮捕。獄中で執筆した「無知の涙」がヒット、4人目の遺児に印税を寄付して話題に、1990年最高裁で死刑確定、このときの判例が「永山則夫基準」として死刑判決を決める際の根拠となる） • 小笠原諸島が日本に返還。 • 10・21国際反戦デーで、新宿駅で学生労働者が騒乱、一次占拠。 • 東京五輪マラソン3位の円谷幸吉自殺。 • メキシコ五輪。男子マラソンで君原健二が銀、サッカー銅に。 • 米大統領の民主党予備選挙中にR・ケネディーが暗殺される。本選挙では共和党のニクソンが当選。
1969（昭和44）年	• 奥崎謙三が天皇の新春一般参賀でパチンコを討つ。 • 映画「男はつらいよ」（渥美清、倍賞千恵子主演、山田洋次監督）シリーズが始まる。 • 米宇宙船アポロ11号人類初の月面着陸に成功。
1970（昭和45）年	• 70年安保、前年から学生紛争が激化。 • よど号事件、日本赤軍派学生9人がJALよど号を乗っ取り北朝鮮に。 • 大阪万博が開催される。 • 『an・an』創刊。 • 沖縄でコザ（現沖縄市）騒動。

1972（昭和47）年	• 札幌で冬期五輪。70メートル純ジャンプで笠谷幸生らがメダル独占。 • 連合赤軍事件（浅間山荘事件）。 • 沖縄が日本に返還。 • 田中角栄が首相に選出される。 • 日中国交回復。 • 日本赤軍の岡本公三ら3人がイスラエルの空港で機関銃を乱射（ロッド空港事件）、26人死亡、（岡本は1985年に捕虜交換で釈放）。 • 早大校内で川口君内ゲバ殺人事件。 • 横井軍曹グアムで発見、帰還「帰って参りました……恥ずかしながら」が流行語に。 • ミュンヘン五輪。月面宙返りで男子鉄棒の塚原光男が金に。
1973（昭和48）年	• オイルショク（一次）で日本でトイレットペーパー（トイレットペーパーがスーパーから買い占めでなくなる）騒動。発端は第四次中東戦争（イスラエルとアラブ間）。 • ストに怒った通勤客が国鉄山手線の新宿駅などで放火打ちこわし（国電暴動）。 • 金大中氏（後の韓国大統領）が東京で韓国KCIAに拉致される。 • 競馬のハイセイコーがNHK杯で10連勝。 • プロ野球で川上巨人がV9。 • 漫画「あしたのジョー」がヒット。 • 江崎玲於奈氏、ノーベル化学賞受賞。
1974（昭和49）年	• 平日昼休みの東京・丸の内で過激派による三菱重工本社ビル爆破事件で8人死亡、385人が重軽傷。 • 金権批判で田中首相が辞任、三木武夫が後任に。 • 小野田少尉ら旧日本兵がフィリピンで発見、「元上官」命令で帰還。
1975（昭和50）年	• ベトナム戦争終結、アメリカが負けた初めての戦争に。 • 日本赤軍クアラルンプール事件。 • 室蘭本線で最後のSL旅客列車運転。 • プロ野球、広島東洋カープが26年目の初優勝。
1976（昭和51）年	• ロッキード事件で田中前首相逮捕。 • 三木武夫首相辞任、福田赳夫（福田康夫元首相の父）が首相に。 • モントリオール五輪。
1977（昭和52）年	• 日本赤軍が日航機をハイジャク、赤軍兵士6人と16億円を強奪。
1978（昭和53）年	• 大平正芳が首相に。 • 靖国神社が東条英機らA級戦犯を合祀。以降、天皇陛下は参拝を取りやめ。 • 「空白の1日」。法政大卒業後浪人生活を送っていた江川卓投手が巨人入団。 • 成田闘争激化の中、成田空港開港。 • プロ野球、ヤクルトスワローズが初優勝。

1979（昭和54）年	• ソニーが「ウォークマン」を発売、世界的なヒットに。 • 韓国朴大統領がKCIA部長に暗殺される。翌80年、全斗換が大統領就任。
1980（昭和55）年	• 大平首相が急死、戦後初の衆参同時選挙で自民圧勝。鈴木善幸内閣発足。 • 中国で胡耀邦が総書記になり、経済自由化、IMFに加盟。 • 山口百恵、三浦友和が結婚。 • リクルートが女性向け就職誌「とらばーゆ」創刊 • モスクワ五輪、西側はソ連のアフガニスタン侵攻に抗議、ボイコット。日本の山下（柔道）、瀬古（マラソン）ら「金メダル」候補は幻の金に終わる。 • ニューヨークでジョン・レノン暗殺される。
1981（昭和56）年	• 英国チャールズ皇太子がダイアナ嬢と結婚。 • 深川通り魔殺人事件母子ら4人刺殺される。 • 北炭夕張新鉱でガス突出事故。93人死亡。 • 福井謙一氏、ノーベル化学賞受賞。
1982（昭和57）年	• 中曽根内閣発足。 • 500円硬貨発行開始。
1983（昭和58）年	• 日本海中部地震。秋田などで津波で104人死亡。 • 愛知県の戸塚ヨットスクールで3人死亡、2人行方不明。 • 東京ディズニーランド開園。 • NHK朝の連続ドラマ「おしん」がブーム、視聴率は驚異の60%。
1984（昭和59）年	• 日経ダウが1万円の大台に。バブル経済始まる。 • グリコ森永かいじん21面相事件。 • 『週刊文春』が「疑惑の銃弾」を連載「ロス疑惑」事件（85年逮捕、1994東京地裁で無期懲役、後に最高裁で無罪）。 • 『週刊少年ジャンプ』400万部突破。 • ロサンゼルス五輪。
1985（昭和60）年	• 日航ジャンボ機墜落事故（520人死亡と単独機事故では世界最大の航空機事故に。生存者は4人）。 • 吉田義男監督の阪神タイガースが21年ぶりにリーグ優勝、日本シリーズも勝ち、初めて日本一に。
1986（昭和61）年	• 竹下登が首相に。
1988（昭和63）年	• リクルート事件。非上場会社リクルートコスモス株を政・財・官界の多数に贈与発覚。 • ソウル五輪。

1989（昭和64、平成元）年	• 昭和天皇崩御、元号は平成に。 • 竹下首相辞任、海部俊樹首相に。 • 女子高生コンクリート詰め殺人事件（東京・足立）、91年に少年4人の有罪確定。 • 連続幼女殺害事件（宮崎勤事件）。 • 坂本弁護士一家失踪（オウム事件）。 • 中国で改革派の胡耀邦総書記死亡。 • 北京で、学生民衆らが天安門に集結、人民軍が弾圧（天安門事件）。 • ベルリンの壁崩壊。 • 東証ダウ（日経平均）が3万8915円の史上最高値、バブル経済が頂点に。
1990（平成2）年	• 本島等長崎市長銃撃される。 • 秋篠宮殿下が学習院の同級生の川島紀子さんと結婚。 • バブル崩壊。
1991（平成3）年	• 証券スキャンダル。 • 長崎県島原の雲仙普賢岳噴火による火砕流で報道陣ら死者不明約40人。 • ソ連でゴルバチョフ大統領辞任。1917年から続いたソ連が崩壊、国名もロシアに。 • 100歳姉妹金さん銀さんブーム。 • ミャンマーの民主化リーダーのアウン・サン・スー・チーがノーベル平和賞受賞。
1992（平成4）年	• 佐川急便事件。 • 金丸前副総裁逮捕。 • 大相撲の関脇・貴花田と宮沢りえが婚約、しかしその後破棄。 • 米ロス暴動。 • ボスニア内戦。 • 「クレヨンしんちゃん」大ヒット。 • バルセロナ五輪。
1993（平成5）年	• ゼネコン汚職、宮沢喜一首相辞任、細川内閣発足。 • 皇太子殿下が元外交官の小和田雅子さんと結婚。 • サッカーW杯でブラジルがイタリアを下して24年ぶり4度目の優勝。 • 大相撲、曙が外国人初の横綱に。 • 北海道南西沖地震。
1994（平成6）年	• 羽田内閣約1ヶ月のあとに、村山富市自民・社会党連立内閣発足（戦後2回目の社会党党首の内閣、1回目は吉田1期と2期の間の片山哲内閣）。これ以降は、また橋本龍太郎、小渕と自民党が内閣を握る。 • 大江健三郎にノーベル文学賞受賞。 • 大河内清輝君自殺事件（愛知県西尾市）。

1995（平成7）年	• 阪神淡路大震災。 • 地下鉄サリン事件。
1996（平成8）年	• パソコンのウインドウズ95ブーム。 • アトランタ五輪。
1997（平成9）年	• 新進党解党。小沢一郎などが自由党に。 • ポケモンショック。
1998（平成10）年	• 小渕恵三内閣発足。 • 長野冬季五輪。 • サッカーW杯フランス大会。
1999（平成11）年	• 国旗国歌法、通信傍受法、日米安保新ガイドライン法成立。 • 光市母子殺害事件。山口県光市で少年が母子2人を殺害（広島高裁差し戻し審で2008年に死刑判決）。
2000（平成12）年	• シドニー五輪で高橋尚子が、日本で初めて女子マラソン優勝。 • 小渕恵三首相急死を受け、「五人組の談合」で森喜朗内閣発足も支持率低迷。
2001（平成13）年	• 「えひめ丸」事故への対応をめぐって批判を浴び、森喜朗首相退陣。小泉純一郎内閣発足。 • 米国東部において発生した同時多発テロ事件。日本人を含む、5,000名以上が死亡。報復として米がアフガニスタンを攻撃。
2002（平成14）年	• サッカーW杯日韓大会でブラジル優勝。 • H-IIAロケット3号機が打ち上げられる。 • 小泉純一郎首相が日本の首相として初めて朝鮮民主主義人民共和国を訪問。日朝首脳会談で、北朝鮮の金正日総書記が、日本人拉致問題を公式に認める。
2003（平成15）年	• コロンビア号空中分解事故。スペースシャトルコロンビア号が帰還飛行中にテキサス州上空で空中分解し、搭乗員7名全員が死亡。 • 「トリビアの泉」が流行。
2004（平成16）年	• アテネ五輪、男子体操団体で20数年ぶりに優勝。野口みずきが女子マラソンで優勝。 • 中越地震。 • JR宝塚線、尼崎で脱線事故。死者107人と戦後最大級の鉄道事故。
2005（平成17）年	• 小泉純一郎が郵政民営化の是非を問うた衆議院選挙、いわゆる「郵政選挙」で自民党圧勝。公明党との連立で3分の2の議席を占める。

2006（平成18）年	• トリノ冬季五輪、荒川静香が女子フィギアで華麗なイナバウアーを披露、日本人初の優勝。 • 安倍晋三（岸信介元首相の孫、元自民党幹事長の安倍晋太郎の息子）内閣発足。
2007（平成19）年	• 防衛庁が防衛省に昇格。守屋元事務次官収賄で逮捕。 • 参議院選挙で民主党が圧勝、福田康夫（福田赳夫首相の子供）内閣発足。
2008（平成20）年	• 福田康夫首相辞任で後任に麻生太郎（吉田茂元首相の孫）。 • ミャンマーにサイクロン、死者10万人超える。中国・四川省でM8の大地震、やはり死者・行方不明者約10万人。 • 秋葉原の歩行者天国で通り魔殺人事件、通行人をトラックで跳ね、ミリタリーナイフで次々と殺害、7人死亡、けが人多数。25歳の犯人は青森出身のトヨタ系自動車工場の派遣社員。 • 英国スピード社の水着騒動、北京五輪開催。 • リーマン・ショックで世界経済がどん底に。
2009（平成21）年	• アメリカの自動車再大手の3社のうち、クライスラー、GMが倒産、日本のトヨタ、ニッサン、ホンダなどもハイブリッド車を除き、販売激減、広告代理店最大手の電通が創業以来、はじめて赤字に。 • DNA冤罪事件（足利事件）で無期懲役囚が無罪で釈放。 • 民主党が総選挙で圧勝。政権交代。
2010（平成22）年	• ユーロ圏の経済危機。 • タイの政情混乱。 • 鳩山首相辞任、後任に菅直人財務相。 • サッカーワールドカップ南アフリカ大会。日本は決勝トーナメントでパラグアイにPK負け。 • 参議院選挙、民主党苦戦。
2011（平成23）年	• 大相撲、八百長問題発覚。 • 東日本大震災。 • 9.11テロのウサマ・ビンラディン容疑者発見、殺害。 • 女子サッカーワールドカップドイツ大会。なでしこジャパン初優勝。